

編集後記

『臨床教育人間学』は本号で12号を数えますが、編集後記執筆を大学院生が任されるのは初めての事です。このような大役を与えて下さいました編集責任者の齊藤直子先生に感謝申し上げます。

経費節減のため、今号より印刷・製本以外の全ての編集作業を自前で行うことになりました。引用・参考文献の表記の統一からレイアウト・ブランク・フォントの調整まで、実に細かな様式・体裁の管理が必要でした。それでも先生は、論文内容とは直接関係ないこうした管理が紀要の価値と信用を高めるものだと力強く語られ、細大漏らさず確認作業を完遂されました。それに導かれて、私も自分の役割を最後まで果たすことができたと感じています。そのことにも感謝申し上げます。また、この度の編集プロセスの変更のために、ご寄稿下さった皆様には論文執筆の際に多大なご負担をお願いすることとなりました。皆様のご理解とご協力に心よりお礼申し上げます。

紀要の編集作業中、ある記憶が甦りました。私が幼い頃は現在よりも工業製品の品質の差が大きく、とくに型に流し込んで作られる樹脂製のおもちゃなどは、型と型の隙間からはみ出た樹脂の残り具合で外観や手触りが大きく違っていたことを思い出したのです。質感の良さというのは、製品が発揮すべき機能を際立たせるものです。一方質感の悪さとは、製品の機能からすれば無用不要の視覚的・触覚的摩擦、製品の機能の輪郭を鈍らせる摩擦です。人は行為の中で得られる抵抗から物を知覚し、そこから翻って己を知覚するとも言われます。だとすれば、質感の悪さは正確な知覚の妨げ、そのことが人を苛立たせるのでしょう。また、人は道具の用途を見出し、人が用途に従って道具を用いることを通して、世界が出会われるとも言われます。だとすれば、質感の悪さは道具や製品との出会いの不全、ひいては世界との出会いの不全を引き起こし、これがまた人を苛立たせるのでしょう。

今思えば、私に与えられた仕事は、製品としての紀要の質感を向上させて読み手の苛立ちを排除すること、つまり紀要の機能を際立たせることでした。そして紀要の機能とは、読み手を掲載論文の論理構造に集中させることでした。紀要を読んでくださる皆様のように熟練した読み手は、あらゆる差異に敏感に反応されることと思います。様式や体裁の整わない印刷物は、論理構造とは無関係なノイズを読み手に拾わせ、甚大なフラストレーションを生みます。このことは、間接的に掲載論文の評価に繋がります。編集補佐の仕事を通じてこれに気づけたことは、私自身が論文を執筆する上でも貴重な自戒を与えてくれました。正直なところ、時間と労力を無償で支出することにやるせない思いを抱えていたことは否めません。しかし、これから学問の道を行くにあたって得がたいものを授かったこと、そのような仕事を与えられたことに感謝しています。

ところで最初にも述べました通り、これまでの編集後記は全て編集責任者の先生の執筆によるものです。その中で、講座紀要の意味合いや位置づけがたびたび説明されています。創刊間もない時期には、教育人間学と臨床教育学という二つの学問のあり方や『臨床教育人間学』という誌名の由来に関連づけて、紀要の意味合いや位置づけが説明されています。そのうちの一つ2001年の第3号では、矢野智司先生が次のように述べていらっしゃいます。

かつて市場は、異邦人との交換のために、共同体と外部との境界線に立てられたという。…市場では異なる言語ゲームに属する者同士が、語り合うルールもないところから出発する。年報『臨床教育人間学』は、広く外部へと開かれ、危険を怖れず、いかなる他者とも知を交換し合うことのできる活気あふれる「市場」である。この場所で、従来の研究者ではない、さまざまな領域を横断することのできるエネルギーのある研究者が育っていくことを願っている。

たしかに、立てられて間もない市場に商品を持ち寄る者たちは言語ゲームを共有していません。言語そのものが異なるだけでなく、交換の前提となる度量衡や貨幣の制度も未発達で、交換が成立する確証はありません。交換のための場所で交換の成立が確証されない。このような矛盾を抱えながら、なぜ最初の市場は立てられたのでしょうか。何が人をその場所へと駆り立てるのでしょうか。

形而上学的欲望は帰還を切望することがない。形而上学的欲望は生誕の地とは異なる国への欲望だからである。…形而上学的欲望は充たしえない〈欲望〉である。…形而上学的欲望は善良さのごときものである。〈欲望されたもの〉が欲望を充たすことなく、更に欲望を煽るからである。

E. レヴィナスは『全体性と無限』の冒頭でこのように述べています。利潤への関心 (intérêt) や充たされるべき欲求 (besoin) ではなく、充たされることも尽きることもない欲望 (désir)こそ、先ほどの問いの答えであろうと思います。レヴィナスが欲望と呼ぶものは、絶対的に他なるもの、姿の見えぬ他者を希求するがゆえに、絶対に充たしえずまた尽きることもありません。言語ゲームの外部からやってくる他者を目指す欲望を誘引するのが、「生誕の地とは異なる国」との境界線上に立てられる市場なのです。したがって本紀要は、維持され利潤追求の場となる前の市場、すなわち欲望を誘引する場所でなければなりませんし、また私たち大学院生には、商人になる前の商人であることが期待されているのです。

ただ、本紀要も今回で12号を数え、立てられたばかりの市場とは様相を異にしています。維持を目指した制度化と効率化が求められるのも事実です。このことは、前述の編集プロセスの変更に色濃く表れています。また、次号から編集補佐を2名体制とし、うち1名は前号から連続して担当することにしました。これは、今後も大学院生が編集作業を担うにあたり、ノウハウを蓄積し伝達してゆくための対応です。これらは、いわば市場が維持され安全確実に交換が続けられるための施策です。これと並行して、市場になる前の市場のアヴァンギャルドな性格が薄れてゆくことも考えられます。実際、投稿しても研究業績として十分認められないために投稿先に選ばれない、無いよりはましな業績のための投稿先となるといった状況があります。あるいは編集側の方でも、割に合わない努力を回避するといった傾向がないとは言いきれません。これらは、紀要が intérêt や besoin の次元へ回収されつつある兆候かもしれません。やはり、充たされることも尽きることもない désir は、それに堪える無尽蔵のスタミナを要求するのです。

だからといって、私たちが商人になる前の商人らしさを捨てた訳ではありません。私たち同学年の3名は、昨冬修士論文を書き終えたあとで知識不足を痛感し、直後に読書会を立ち上げました。以来徐々にメンバーを増やし、講座の院生の多くを巻き込んで毎週開催しています。H. アーレント『人間の条件』、E. レヴィナス『全体性と無限』を経て、現在は M. ハイデガー『存在と時間』に取り組んでいます。指導者と解説書を持たない読書会は、権威としての「正しい」読み方、ルールとしての共通の読み方を知りません。そもそもなぜ読むのかと問われて、皆が同じ答えが返すとも限りません。正しさを保証するものも守るべき正しさもないため、時に際限なくやり合うこともあります。それこそ立ったばかりの市場に漲る活気と言うべきでしょう。この意味で、たしかに私たちは商人になる前の商人らしさを保持しています。そして、私たちがその性格を発揮し続ける限り、『臨床教育人間学』もまた、維持のために一定の制度化と効率化を受けてなお、市場になる前の市場としてのアヴァンギャルドな性格を損なうことはない、と信じています。

2013年7月7日
京都大学大学院 教育学研究科 臨床教育学講座
博士後期課程 朝岡 翔